

「物資が充足し、欲望が満たされれば、人間は利己から利他へに向かう」戦後、山形と秋田の県境にある西山農場で開墾生活を送った石原莞爾は、敗戦で廃墟と化した日本のこれからの進路を、しっかりと見据えていた。ともに開墾生活を送った筆者の目に、晩年の石原はどう映っていたのか。

～自給自足の西山農業生活～

秋には石原莞爾将軍をお迎えするから、西山に来て働いてはどうか？

母親の勧めで、庄内地区の東亜連盟の幹部である桐谷誠さんにお会いすると、桐谷さんが経営する西山牧場に誘われました。昭和21年（1946）3月のことで、私は旧制酒田中学を卒業したばかりの17歳でした。

桐谷さんは西山（現、山形県遊佐町）あたりの山林を所有していましたが、石原将軍の「村づくり」の考え方に共鳴し、山林の比較的平坦な場所を選んで、昭和19年（1944）頃から開墾を始めていたのです。私も早速、西山農場の開墾に参加する事になりました。

当時、西山農場にいたのは、桐谷誠さんと奥様の敏子さん、桐谷さんの弟 武さんほか10名に満たない数です。私は畜舎とも35坪位の二階建ての家に数人で住み込みましたが、麓の村から通ってくる人も2、3いました。

さて、秋には石原将軍とご一緒できるというので、6月頃から将軍のお住居を建て始めました。15坪ほどのごく質素なものです。石原将軍が、「都市解体、農工一体、簡素生活」という三原則に基づく、新時代の「村づくり」を計画して西山に転居して来られたのは、10月に入ってからのことです。

私は1年前の9月に新庄で将軍の講演をお聴きしていましたので、お顔は存じておりました。しかし、初めて身近に接した印象は、決して偉ぶることがなく、まるですべてを達観された高僧のような雰囲気のお方であると感じました。

農場での生活は、朝一番の畑の水遣りから始まり、荒地の開墾が主労働でした。掘れどもつきぬ松の根との格闘は、休息にかぶりついた西瓜の美味さと相まって、今では懐かしい昔語りです。栽培作物は薩摩芋、西瓜、馬鈴薯、燕麦、瓜、苺など。薩摩芋や西瓜は、農場の唯一の現金収入源であり、特に薩摩芋は、米や肥料の交換物として、当時貴重品です。その他、

牛一頭、山羊一頭、鶏数羽など人畜同居、見よう見まねの自給自足でした。

～私が総理大臣だったら、賠償を請求する～

昭和 22 年（1947）5 月、酒田で国際軍事裁判の臨時法廷が開設され、石原将軍は参考人として出廷する事になりました。当時、将軍は膀胱の乳嘴腫のため血尿が出て、ひどく痛み、片時も尿瓶を離せない状態です。長時間の歩行は出来ません。

そこで裁判の前日の 4 月 30 日、私を含む 3 人で、将軍をお宅から吹浦駅まで、リヤカーでお送りしました。西山から駅まで、私の足で約 20 分。揺れてはお体に障るだろうと、林道の木の根を避けながら、慎重にお運びしたことを覚えています。将軍は和服に戦闘帽をかぶり、膝に毛布をかけておられました。駅で将軍は同志の車に乗り換えて酒田に向かわれました。

翌 5 月 1 日から裁判です。その日、私は将軍の奥様から膝かけと書類を託され、列車で酒田に向かいました。将軍が宿泊されている酒田ホテルに着いたのは夕方 5 時頃です。ちょうどその時、応接室で将軍と数人の外国人も含めた記者団の会見が始まるところでした。その場に居合わせることになった私は、興味津々で耳を傾けました。以下、その時の、将軍のお話の要点をかいつまんで紹介してみます。

「君たち。私がこれから話すことは、日本で発表してもらっては困る。自国に帰ってからにしてほしい。当然マッカーサーの検閲を受けて、発表が禁止されるだろうからだ」

「私は僭越ながら日本国民を代表して、日本が何十年もの間、アジアの諸国民にご迷惑をおかけしたことをお詫びする。日本は侵略者だといわれるが、欧米諸国が昔からやってきたことを日本が見習ったのも事実である。反面、日本人の心の底には、アジアの解放があったことも確かだ」

「(満州事変は日本軍の謀略かという質問に対し) 超満員の汽車の中で足を踏まれると、『お前が踏んだ』『いや、お前が先だ』という争いになって、どちらが先という決め手はない。満州事変がどちらの謀略かというのも、当時の満州の情勢を知らない者のいうことだ」

「アメリカの無差別爆弾や原子爆弾の使用は、全く非人道的な暴虐行為であり、国際法を完全に侵犯したものだ。私が総理大臣だったら、アメリカに対して賠償を請求する」

「ソ連が不可侵条約を一方的に破って戦争を仕掛けた上、何十万人もの人々を捕虜として酷使したことは、非人道の極みである。これを見たらマルクスが地下で泣くだろう」

「今度の戦争裁判なるものは、馬鹿げた猿芝居だ。ルーズベルトは死んだから仕方がないが、トルーマン、スターリン、チャーチルを一堂に集め、日本からは及ばずながら私が出て、堂々と論戦したらよかろう。それが本当の戦争裁判である」

「この度の出張裁判の関係者は、特別列車を仕立ててやって来たそうだ。ご覧の通り日本人は列車に溢れているのに、占領軍の僅かな連中が威張り返っている。日本が満州や中国で威張っていたといっても、そんなことはやらなかった。満員列車の中で、赤ん坊を抱いた日本人の母親が、ギュウギュウ押されて苦しんでいるのに、一方では占領軍が、がら空きの特別列車でキャアキャア騒いでいる。こんなことが続くようでは、軍勢は完全に失敗するだろう・・・」

会見は 2 時間位続きました。将軍は澄んだ瞳と独特の笑顔で、冗談と皮肉を連発して一同を爆笑させながら、聞くもの一人一人に深い感銘を与えていたように思います。

～欲望が満たされれば、人間は利他に向かう～

石原将軍の盛名を慕って、西山にはさまざまな人が訪れましたが、将軍は人目で相手がどんな人間かを見抜いたようです。嘘はまずつけません。また、私たちのような若い者に対しても絶対に偉ぶらず、いつも同じ目線で話して下さいました。権威ぶった人が大嫌いで、そんな人が訪ねて来ると、「私、お百姓仕事で忙しいので」と相手にもされませんでした。

さて、西山農場で石原将軍が掲げた三原則「都市解体、農工一体、簡素生活」について説明しておきます。この三原則は、これからの文化国家のあり方を示したもので、都市解体は、都市部への過度の人口の集中が生活環境の悪化、人心の荒廃を招くものになるので、自然に親しむ田園生活に帰れということ。農工一体は、工業の地方分散を行うとともに、都市生活のよい点を全国に普遍化させ、都市と地方の格差をなくして、バランスよく国を発展させること。

そして簡素生活は、貧乏生活を意味するのではなく、自然と調和し、余分なものを排除し、高度の科学文明を駆使する高雅な生活を意味しています。将軍は、「適度な労働はむしろ健康に良い。心身健康にして物事に向かえば、感性が磨かれて素晴らしい発明を生み出す。またそうしない限り、本当の王道は理解できない」と語り、実践しました。

王道とは、人間の直観力が復活する新しい文明をいいます。三原則も含めてこれらを、今ようやく日本人は理解出来るようになり始めているのかもしれない。

また、石原将軍は、敗戦直後から戦争放棄を訴えました。当時、私が「武力がなくて、独立

国としてやっていけますか」と、物怖じせず申し上げますと、「空気や水に境目をつけて、『ここからは俺の空気だ。他人は吸うな』などと言う者はいない。同様に、文明が発達し、物が空気や水のようにできてくれば、『これは俺のものだ』という欲望による戦争はなくなる。これまでのように、作った物を戦争で悉く破壊して一体何が残るのか。戦争は、近い将来絶滅するのだから、軍備に力を入れる必要はない」と仰いました。

そしてさらに、「人間は腹一杯になったら、それ以上は食べられない。同様に物資が充足し、欲望が満たされれば、人間は利己から利他に向かうはずである。自分だけよければいいのではなく、他人のためになることをする。それが人間の本当の生き方ではないのか。」

終戦後の食うや食わずの日本人に対して、しっかりとした「日本の未来像」を掲げたのが石原将軍でした。文明の衝突の時代を迎えているといわれる今日、将軍の文明観、人間に対する考え方を、私たちは改めて見直すべきではないかという思いを強くしております。